カンナニの言語政策

西　成彦*

湯浅克衛の第一作「カンナニ」は，植民地朝鮮に勃発した「三・一独立運動」と朝鮮総督府による鎮圧行動を大きくクローズアップしたために，大幅に検閲・削除された形での発表になったが，それでもなおかつ今日的な観点からすれば評価に値する。本論では，なかでもヒロインであるカンナニが男友達の龍二に「朝鮮語覚えなさい」と言い渡す場面に注目した。今日と異なり，舞台となった1919年当時，そして小説の書かれた1935年当時，バイリンガルであることは二級市民の証であるかのように見なされていたからだ。本論では，1919年前後の東欧地域（並み居る帝国の崩壊後に新興国家が一気に台頭した），さらには1945年後の東欧地域（国民国家と少数民族の両立可能性が期待できなくなっていた）を適宜参照しながら，カンナニのバイリンガリズムが持った歴史的射程を考察する。最終節では，戦後日本の引揚者および在日朝鮮人の文学を考える際にもバイリンガリズムを視野に入れることが重要であることを指摘する。

キーワード：比較文学，植民地文学，民族自決，言語教育，言語政策，バイリンガリズム

一．幼い内地人の疎外感

かつて，植民地朝鮮での生活歴の長かった内地日本人が現地を舞台に小説や回想を書くにあたって，彼ら彼女らがしばしば用いたモチーフのひとつに，旧正月の風景がある。

湯浅克衛の「カンナニ」は，「真黄色の凧，赤と紫で半分づつ仕切つた凧，白地に緑の丸を画いた凧，色紙を撒き散らしたやうに空一面に夥だしい凧が強い風に吹きまくられ乍ら，浮かんでは沈んでゐた」(p. 32[1]) というのどかな風景から始まる。しかも，そこで「歓声」をあげているのは，もっぱら「鮮童」(p. 33) たちであって，内地人の子どもではない。主人公は，「しやがんだ〔まま〕頬杖をついて，少年達の楽しさうな遊びを見てゐ」(p. 34) るだけなのだ。いくら腰を低くして「仲間に入れて呉れ」と頼みこんだところで，相手側は「白い眼」を向けてくるだけだし，なんとか独楽遊びに加えてもらえたとしても，「皆が相手の白衣の子に加勢して散々に負かされる」のがオチだった。そして，すごすごと引き下がった主人公は，「それらを自分の紺絣と下駄の所為」にして，いっそのこと，内地人の服装を脱ぎ捨ててまで，朝鮮人が穿くようなようなズボンの「足首をリボンで結んで見たい」と思うのである。しかも「皆と一緒に遊びたい」という気持ちは，「皆」の側からよそよそしく撥ねつけられるだけではない。「そんな鮮童（チョンガー）の遊ぶものなど」と言って

＊立命館大学先端総合学術研究科教授

「取合はない」内地人の父親の側からも，その夢想は無残にも打ち砕かれてしまうのだ。

宗主国から植民地に渡ってきた内地人少年が引き受けなければならない「疎外感」は，植民地を舞台にした宗主国側がうみだした文学のなかで，ある意味，象徴的な主題であると言えるだろう。植民地朝鮮の旧正月の風景は，内地人の子どもを主人公とするかぎり，こうした「疎外感」を抜きにしては描きえないものなのである。植民地の子どもの群れを前にしたとき，内地人の少年少女は，見るも哀れなくらい，精彩を欠いてしまう。

同じような「疎外感」は，森崎和江の『慶州は母の呼び声』にも描かれている。

> 冬の陽だまりにたたずんで，朝鮮人の女の子が遊ぶのを見ていた。みんな晴れ着だった。赤いチマに緑のチョゴリを着ていたり，ピンクのチマに赤いチョゴリを着ていたり，ぎっこんばったんと長い板の両側でシーソーのように交互に空に跳び上がる。桃色のゴムシン〔引用者注：「シン」は「靴」のこと〕の裏の白いのがかわいい。わたしはつりこまれて笑う。(p. 52[2])

ただ，「カンナニ」の龍二と違って，この森崎には朝鮮人のネエヤが強い味方としてついていた。だから，そのネエヤから「こんどは和ちゃんの番よ」と背中を押してもらうことで，彼女は少女たちの輪のなかにすんなりと加わることができた。そして，「ノルテギ」の名で親しまれる「シーソーゲームのこつはすぐに会得した」というのである。しかし，それでも「疎外感」は払拭できなかった。朝鮮人の少女たちはよそ行きのチマチョゴリを纏っていたのに，森崎はひとりだけ普段着の「短いスカートとセーター」といういでたちで，それが彼女には「さみし」(p. 53) く思えたというのだ。しかも，かすかに記憶に残っているこの冬の日の出来事が，朝鮮では陰暦の正月に恒例の遊びごとだということを彼女が知るのは，帰国してから，朝鮮のことを後づけで知ろうとするようになってからのことであった。

「植民地支配」の一語で片づけようとすると，「支配」の片棒をかつぐことになった宗主国人のなかに根を下ろした「疎外感」のことなど，なかなか視界には入ってこない[3]。それは，内地人の子どもたちが生きた歴史的な時間のなかでは，劣等感ではなく（植民地主義は，自然状態では「劣等感」に結びつきそうな感情を人為的に「優越感」へと転位させることに長じていた），罪責感でもなかった（多くの場合，それは，日本の敗戦，そして植民地喪失がもたらした新しい歴史認識の副産物でしかない）。いくら朝鮮が日本の一部だと周りからすりこまれようとも，内地日本人は朝鮮にあっては数的マイノリティでしかなく，そのことに過度に敏感なのが子どもたちだった。子どもは，いくら自分の「感性を養ってくれたもののことごとくが，朝鮮の山河や不特定多数の朝鮮の人びとのやさしさであったといえるほど，自分の根っこが，あの風土とそしてそこで生きている人達と共鳴していた」(p. 9) と，おとなになってからふり返ることになろうとも，その共鳴音は，鈍く，くぐもっていたのである。森崎は植民地朝鮮時代のことをふり返りながら，それを「幾重にも屈折した私の少女時代」と名づけることになる。

湯浅の「カンナニ」は，初出が1935年である。湯浅自身は，1910年の香川県生れで，父が朝鮮に赴任したことにともない幼少時に朝鮮に渡

り，いわゆる移民風の名づけによるなら「準二世」にあたる。京畿道水原（スウォン）の小学校を出て，京城中学を卒業したあと，1927年に内地に戻り，その後，植民地朝鮮を舞台にする小説を，あたかも朝鮮時代を懐かしむようにして書くようになる。「カンナニ」はそんな彼のデビュー作だった。ただ，1919年の「三・一独立運動」と，朝鮮総督府による鎮圧行動が流血を招いた水原で見聞きしたことがらを小説の後半部で大きく取り上げたために，小説の後半部分は掲載にあたって全面削除となり，伏字分も含めてその全貌が明らかになるのは，日本の敗戦後のことである[4)]。しかし，1935年の『文藝評論』に発表された作品の前半部分を読むだけでも，植民地における内地人少年と，現地人少年のあいだの根深い確執についてなど，そのエッセンスは十分に堪能できる[5)]。

他方，森崎和江の『慶州は母の呼び声』の初出は1984年で，1927年，朝鮮の大邱（テグ）に生れた森崎は，1944年に内地の女子大学に進学し，戦後は九州在住の詩人として，また『からゆきさん』（1976）などのエッセイで名をなし，その彼女が，朝鮮時代の思い出にテーマを限定して本格的に書いた回想がこれである。まさに「植民地二世」に他ならなかった彼女は，「基本的な美感を〔中略〕私のオモニやたくさんの無名の人びとからもらった」（p. 19）と書かずにはおれなかった。その回想文のなかでは，子ども社会にまで根を下ろしていた二民族間の抗争が湯浅の「カンナニ」ほど大きくはクローズアップされていないが，逆に敗戦後の文章であるだけに，自分のことを「昔の罪深い少女」（p. 13）と書くなど，「植民地二世」ならではの「罪責感」が前面に押し出されるかっこうになっている。

本稿は，植民地朝鮮を舞台にしたいくつかのテクストを手がかりにして，そこでの言語問題に光をあて，日本植民地主義が引き起こした数々の非対称性のひとつを考察の対象に据えるものである。「カンナニ」の龍二や，森崎和江は，日本植民地主義の加害者性を大枠としては背負いつつ，同時にその被害者でもあった内地日本人なのである。

二．植民地のバイリンガル状況

先に引いた「カンナニ」の冒頭部で，朝鮮の少年たちは，旧正月の遊びごとを，もっぱら朝鮮語だけで打ち興じているかに見えるが，じつはそうではない。子どもたちのなかには，「日本流のお正月に学校で歌つた『年の始め』を歌つてゐる少年も居た」（p. 34）らしいのである。植民地の教育機関は，現地の子どもたちに「国語」を授けることに熱心だった。言い方を変えれば，現地人のバイリンガル化は，学校（現地人の通う小学校は「普通学校」と呼ばれた）という場を介して，着々と進行中であった。それこそ，学校という場は，朝鮮語の使用に対して抑圧的にはたらき，現地人のバイリンガル化には，将来的な朝鮮語の「廃滅」[6)] に向けた過渡的措置としかいえないほどの荷重がかかるようになっていた。今日は「二重言語作家」の名で呼ばれることが普通になっている朝鮮人日本語表現者の次から次への登場は，まさにそのことを示していた。

それに対して，「カンナニ」の主人公である龍二は，「仲間に入れてくれ」とかりに声に出せたとしても，それは日本語でしかなく，もし片言の朝鮮語をあやつってそれが言えたとしても，気後れを一掃することは難しかっただろう。たまたま「ノルテギ」の仲間に加えてもら

えた森崎の場合でも，それは朝鮮人のネエヤが「こんどは和ちゃんの番よ」と，水を向けてくれたからにすぎない。彼女は遊びを楽しんで，「みんなが笑うときはわたしも笑っていた」（p. 53）というが，しょせん「女の子たちのことばはわからない」まま，場の空気を読んで笑うだけなのだ。まがりなりにも「国語」としての日本語を身につけ，バイリンガルとなる途上にある現地の子どもたちとは対照的に，内地人の子どもは惨めなくらいに不器用な「一言語使用者」だった。

もちろん，大局的に見れば，国民国家的な「国語至上主義」を掲げながら遂行された帝国の植民地支配は，宗主国出身者がどこにあっても「一言語使用者であることの不都合が最小限に食い止められるシステム」[7] に基盤をおいていた。であればこそ，社会言語学者のアジェージュが一般化して言ったように，「いかにその民族語に愛着を持っていたとしても，バイリンガルの話し手によって話される民族語の方が，その言語しか使わない話し手によって話される民族語よりも，危機におちいる度合が大きい」[8]，このことがそこでもまさに実証されようとしていたのである。日本の植民地における言語政策は，多くの植民地地域で進行していたこの一般原則を味方につけて，現地語の「廃滅」を遠からぬ将来に思い描きさえした。

もっとも，19世紀から第一次世界大戦にかけて鎬を削った西洋列強のなかで，ハプスブルク帝国の言語政策は，ある意味で，現在のヨーロッパ連合（EU）を先取りするある種の開明性を特徴としていた。とりわけ，オーストリア帝国とハンガリー王国の「併合（アウスグライヒ）」（1867）以降のハプスブルク帝国の言語政策は，オーストリアの国家語であるドイツ語と，ハンガリーの国家語であるハンガリー語の「平等」を唱えるばかりでなく，「国内のすべての民族は平等である」として，「その民族の特性と言語を守り育てる全面的権利を有する」ことを認めた上で，「複数の民族が住む州では，公的な教育機関は，そのうちの一つの民族が別の民族の言語の習得を強制されずに，自分の言語で教育が受けられるように手段を講じなければならない」[9] とするものであった。もちろん，多言語国家をスムーズに運営していくためには，役所や軍隊の内部での言語の序列化が不可欠であったし，最終的にドイツ語の優位が揺るぐことはなかったが，少なくとも，国内の非ドイツ系諸民族に対して，「自治権」と「言語権」を認めるというその精神は，ハプスブルク帝国の崩壊後も，第一次世界大戦後に独立した東欧諸国における少数民族対策へと受け継がれ，さらに第二次世界大戦後，時間がかかりはしたものの，最終的にはEU の言語政策へと実を結ぶことになったのである。

これを簡単にパラフレーズすると，まずは民族語の保護を優先すること，次に役所や軍隊内部で人材のバイリンガル化・ポリグロット化を推奨・慫慂すること，そして，この「バイリンガル化・ポリグロット化」を期待されるのは，国内の少数民族ばかりでなく，ドイツ語を母語とする言語的マジョリティもまた，程度の差はあれ，同じ期待の対象とされたということである。

こうした往年のハプスブルク帝国を念頭におくと，「日韓併合」の名で知られる大日本帝国による大韓帝国の「併合」は，オーストリアによるハンガリーの「併合（アウスグライヒ）」に見かけは似通っていたものの，実態は植民地支配そのものでしかなかった（どちらかと言えば，「三国分割」で

ポーランド国家を解体した三列強のうち，ロシアやプロイセン＝ドイツのやり方に近かった[10)]）。大韓帝国時代における近代的な教育制度において，外国語としての習得が促された「日本語」は，1911年の「朝鮮教育令」以降は，それまでの「国語」であった朝鮮語＝韓語に代わって「国語」の地位につき，現地朝鮮人に「言語権」は認められず，「国語」による教育の一部に間借りをする形で，朝鮮人向けの教育機関における朝鮮語（現在の用語で言えば「継承語」）の教育がおこなわれるに留まったのである（しかも，それは初等教育に限られ，中・高等教育の現場に朝鮮語はなく，また日中戦争の激化の後は，初等教育からも朝鮮語は消える）。そして，なにより，内地から移り住んだ日本人に対して朝鮮語を学ぶモチベーションを高める措置はほとんど施されなかった。つまり，「日韓併合」は，朝鮮人バイリンガルの養成には熱心であったにもかかわらず，内地人のバイリンガル化に関しては，どこまでも自由意志と個人努力にゆだねるものであったということである。しかも，「日韓併合」以前には，まだまだ自由意志や個人努力の結果，バイリンガル化する傾向の強かった内地日本人が，「日韓併合」後の日本語の「国語」化を経ることで，急速に自由意志は水を差され，ひとびとはみるみる個人努力を怠るようになっていったわけである。

考えてもみて欲しい。明治の初期にすでに進出を開始していた日本人の商人層は，朝鮮人を顧客とするかぎり，その多くがバイリンガルであったと考えなければならない。そもそも，古代から近代初期に至るまで，玄海灘を往復したひとびとは，その民族アイデンティティすら流動的で，その多くがバイリンガルであったと考えるのが自然だろう。ところが，日清・日露の戦争を契機として，日本の軍隊やゼネコンが朝鮮半島に土足であがりこみ，また「日韓併合」以降，多くの植民地官僚が現地に駐在するようになって，それら日本人の大半はまさに「一言語使用者であることの不都合が最小限に食い止められるシステム」に甘え，バイリンガル化する道をみずから断ってしまうのである。結果的に，日本人と朝鮮人の結婚の結果，家庭内がバイリンガル化するとか，アカデミックな好奇心やジャーナリスト的な職業意識を通して，意識的に朝鮮語の習得に励んだ奇特な人間の努力の結果としてしか，内地人のバイリンガル化が進まなくなったのが，日帝統治期だった。

そして，こうしたバイリンガリズムの非対称性の結果，もろにそのとばっちりをこうむることになった一群のなかに，朝鮮に住む内地人の子どもたちもまた含まれたのだった。彼ら彼女らは，植民地主義という暴力装置の効用を恃むこともできず，バイリンガル化する途上にある現地人少年少女の生命力に気圧（けお）され，そうした経験を積み重ねながら「外地の内地人」としてのねじくれた自己形成をはからざるをえなかった。

「カンナニ」とは，バイリンガルな朝鮮人へと潑剌と成長の途上にある朝鮮人少女，李橄欖（＝「カンナニ」はその変形）と，「疎外感」に苦しむ内地人少年，最上龍二との，小さな恋の物語である。初出ではバサっと切り落とされた後半部分を念頭におくならば，「三・一独立運動」と，それに対する鎮圧行動の犠牲者となった朝鮮人少女の悲劇，そして，その悲劇に直面した内地人少年の無力感が作品の主題であるかのように見える[11)]が，その後半部分を敢えて度外視した場合，「カンナニ」は植民地朝鮮の言語問題を扱った小説としての特徴を鮮明に示

すことになるだろう。

三．カンナニの言語政策

龍二がカンナニに出会うのは，内地から渡ってきた直後で，彼にとって朝鮮語は，耳慣れない外国語以外のなにものでもなかった。もちろん，彼が通う小学校に「朝鮮語」の単元があろうはずもない。

龍二は，朝鮮人両班の邸宅の「龍宮のやうな御殿」（p. 42）に目をみはり，「芝生の上に寝そべりながら」，「総督になつたら，こんな家に住むことが出来るに違ひない」と呑気に自分の未来を夢見ていた。そんな龍二の前に，いきなりひとりの少女があらわれ，「流暢」（p. 43）な日本語をあやつりながら，「いかんのよ，小学生」と話しかけてくる。それどころか，「わしが小学生云ふのなんで知つてるのぞな」と，龍二が四国訛りまるだしなのに驚いて，「小学生は，をかしな日本語使ふのね」と，目を丸くしてみせるのである。

二人は程なく意気投合して，名前を教えあい，おたがいを意識しあうようになるが，ところが翌日，巡査である父親の出勤を見送る龍二の姿を盗み見たカンナニは，どうもその様子がおかしい。そして，二人になったとき，彼女はとつぜん朝鮮語をぶつけてくるのである。「お前巡査の子な（タンシン・スンサ・アドリナ）」（p. 45）と。

龍二にとって，この朝鮮語はまるでちんぷんかんぷんである。そこで，カンナニは，「『巡査の子と遊んぢやいかん』父が云つたよ」と「今度は日本語で」補って，自分の立たされた崖っぷちの心境をあかす。ところが，思いもしない形で父親の職業を貶められた龍二は，反射的に「巡査は悪いことはせん」と言って，必死に防戦をはかるのだが，カンナニの憂鬱はとうてい晴れない。

> 私の家でも〔中略〕……家を潰された，持つてゐた田畑はいつの間にか「××」のものとなつてゐた。そんな筈はないから刈入れをしてゐたら，巡査がやつて来て父をらうやに入れ，父がやつてゐた書堂は，悪いことを子供等に教へるからと……戸を釘づけにしてしまひ，子供たちを……普通学校に入れてしまつた。それで父は昔出入りしてゐた李根宅に頼んで門番にして貰つてやつと暮らしてゐる。（p. 46）

これが「淋し気」な笑いを浮かべながらカンナニが語ったその一家の来歴であった。彼女が朝鮮独立を志向する家庭のなかに育ちながら，それでも「普通学校」での植民地教育に従順に従って，これだけの内容を，しかも方言色のない日本語でよどみなく話せたのだ。

そして，気分を紛らそうとするかのように，「ホーセンカの叢にしやが」みこんだカンナニは，「その落花」を「掬ひあげて，掌でもみくちやにし」，「その汁」を「小指の先につけてコス」るのだった。そして，「どうしてそないに，手を血だらけにするのかな」と，けげんそうに尋ねる龍二に対して，カンナニは「朝鮮の女の子は皆，かうするよ」と言いながら，おもむろに，胸中をあらわにする。「ね――日本人は皆嫌ひ，巡査は大嫌ひ，それでもお前（タンシン）は大好き」と。

そして，その直後だ。カンナニは，「龍二の顔を両手ではさんでのぞき込むやうにして」，幼いながらも，したたかに，植民地朝鮮の理想を語りだすのである。

> 「タンシンはお前のことよ。朝鮮語覚えなさい。

わたくしが日本語を話せるやうに。ね，そしたらお前（タンシン）と私（ウリ）は朝鮮語と日本語を交ぜこぢやで話出来るね。学校の話や，そのほか，いろんな世界中の話，たくさあーんしよう」[12)]

植民地在住の宗主国出身者にとって，「一言語使用者であることの不都合が最小限に食い止められるシステム」が十全に機能しているなかで，内地人の少年に対して「朝鮮語を覚えなさい」と訴えかけた，その言葉のなかには，植民地朝鮮における言語教育のいびつさに対する断乎とした告発の口調がひそんでいる。内地日本人と朝鮮人が隣人同士として共存していく上で，現地人が移住者の言語に習熟するよりも，むしろ移住者こそが現地語の習熟に励むのがどちらかといえば本筋なのだ。それは，朝鮮人の「自治権」や「言語権」を希求するナショナリズムの口調を超えて，その植民地空間を，現地人と移住者が言語的に対等に共存できる政治社会空間たらしめようという理想の提示でもあった。

カンナニは，第一次世界大戦の終結とともに崩壊したハプスブルク帝国でどのような言語政策や言語思想が練り上げられていたかを知らない。あるいは，同じころ，英領植民地であったアイルランドで，政治的な分離独立やゲール語の復興に向けてなにが議論され，どのような戦いが戦われていたかも知らない。さらには，朝鮮人独立運動の指導者たちが拠り所としたウッドロー・ウィルソンの「14か条」や「民族自決」の原則に則ることで独立を実現させた東欧諸国において，敗戦国ドイツおよびオーストリア系のドイツ人が置かれたマイノリティの権利がどの程度保障されえたのか，そういったことまでは考えが及ぶはずもなかった。しかし，龍二に朝鮮語の学習を促そうとするカンナニの思いの背後には，「三・一独立運動」の闘士たちが考えもしなかった「多言語国家朝鮮」という夢があった。彼女は，龍二が朝鮮を去らねばならないような，ありうべき歴史過程についてはまったく想像がはたらいていない。彼女は，ある意味，龍二が朝鮮半島に骨を埋めるものだと決めつけている。そうしたなかで，彼女は龍二が内地日本人としてその「継承語」にしがみつくことを拒否しているのではない。また，彼女は自分たち朝鮮人にとっての「継承語」である朝鮮語が，生存の危機に追いこまれているという悲観的な現実認識を他の朝鮮人ナショナリストとかならずしも共有しているわけでもない。むしろ，彼女は「日韓併合」の結果，自分たちに「国語」としての日本語が授けられ，その日本語を話す喜びを味わえるのと同じように，龍二たち移住日本人にもまた朝鮮語をあやつる喜びを味わわせ，そうした言語的な対等を達成できた地点にこそ，「それでもお前（タンシン）は大好き」という言葉を位置づけようとするのである。彼女の二言語を「交ぜこぢや」にした告白は，彼女ならではの言語政策と不可分のものであった。

おそらく「日韓併合」以前から，内地日本人と現地朝鮮人のあいだに数々の愛が芽生え，新しい家庭が築かれ，それこそ子どもにバイリンガル教育が施される事例も珍しくなかっただろう。「カンナニ」には，龍二が作文のなかで校長先生の言葉を引きながら，「校長先生は朝鮮人とは仲善くしなければいかん，朝鮮人と結婚する人は偉い人だとおつしやいました。僕もとてもそうだと思ひます」と書く場面がある（p. 57）。また，じっさい，湯浅克衛は，そうした「内鮮一体」を身をもって実現するかのような家庭を素材とする作品を残してもいる（日本滞

在経験のある朝鮮人男性と日本人情婦のあいだに生れた少年を主人公とする「棗」など)。たとえば，そこでは，バイリンガルな朝鮮人とバイリンガルな日本人によってバイリンガル家庭が構成され，「朝鮮語と日本語を交ぜこぢやで話」しながら，「いろんな世界中の話」が食卓で交わされるという現実がすでに定着しかかっていた。

ところが，そういった事例は，あくまでも特異例として片づけられ，植民地支配当局が何らかの措置を講ずることによってそれが加速されるシステムが構築されることはなかった。カンナニの無邪気な思いつきは，龍二と二人でバイリンガル家庭を営みたいという，いささかおマセな空想から生れただけだったかもしれない。しかし，そのような言語思想を，朝鮮人の少女の口から吐かせようとした湯浅克衛というひとりの内地人作家の思惑とはなんだったか。

歴史に「たら」はない。しかし，だからといって，歴史のなかに「たら」を挿入することによって何かを見えてくるようにすること，そして，これからの世界を構想する上で「たら」を効果的に活用すること，そういった知的営為は疎かにすべきではない。かりに，「日韓併合」直後の朝鮮で，ハプスブルク帝国におけるように「自治権」「言語権」を承認するような政策が講じられていたら，そして，それどころか，カンナニがぽろっと口にしたように，言語ヘゲモニーの面で上位にある言語を日常語とする住民に対しても，地域語の習得を促し，場合によっては，それを初等教育の単元として組みこむような政策が採られていたら，それこそ，「三・一独立運動」そのものの展開も違っていたはずだし，第二次世界大戦で日本が敗北した後の戦後処理のプロセスはまったく違った道のりを歩んだ可能性がある。

もちろん，何度も引き合いに出している東欧の例を考えれば，第一次世界大戦後にもなお「民族自決」の原理原則に則って建国された新興国家に，それでも少数民族として居すわりつづけたドイツ系マイノリティは，第二次世界大戦後，二十数年前の実験は大きな惨禍をもたらしたとみなされて，こんどは戦後の分断国家ドイツへの「引揚げ」を勧告されることになった。そうした引揚げドイツ人たちは，「継承語」としてのドイツ語を棄ててはいなかったが，同時に，彼らが所属していた東欧諸国の「国語」についても，かなりの運用能力を身につけていた。しかし，それでも彼らは，もはや非ドイツ人国家に住むことを許されなかったし，また東欧諸国の社会主義化も大きな要因となって，彼ら自身が非ドイツ人国家への残留を望まなかった。したがって，第二次世界大戦後の世界での趨勢を考えると，龍二とカンナニのようなカップルに与えられた選択肢は，龍二が思い切って朝鮮人として生きる道を選ぶか，カンナニが龍二とともに「引揚げ」の群れのなかに混じるか，そのどちらか以外になかったのかもしれない。現実の東アジア史はそんなふうに進行した。

しかし，カンナニの幼い夢が指し示した未来は，バイリンガル家庭がだれからも後ろ指を差されることなく，そうした家庭に育った子どもが，学校でも，学校帰りの通学路でも，だれからもイジメにあったりなどしない，そのような未来だったのではないだろうか。

「カンナニ」という小説が，その前半部分だけでも，十分に現代にまで訴えかけるインパクトを秘めていたとしたら，それは以上のような理由からである。

四.「バイリンガリズムのすすめ」の意味

もっともカンナニの（そして，湯浅がカンナニの言葉を借りて表明した）言語政策は，かならずしも突出し，孤立したものだというわけではない。たとえば，総力戦体制下で，朝鮮語学者，小倉進平は次のように書いていた。

> 近時我が国では日本語の海外学習といふことがやかましく叫ばれて居るが，私は日本語の海外普及を図る前に先づ以て相手の民族の言語を理解せよと進言したい。由来日本人は先天的に語学に不得手な国民であることを以て自ら任じ，支那語や朝鮮語を使用することを以て日本人の威厳でも損ずるものの如くに考へ，また支那人や朝鮮人の外国語に堪能なのを見ては亡国の民族ででもあるかの如く貶め見る癖がある。[13)]

1941年の文章であるが，当時の日本人の一言語使用状況をきわめて批判的にとらえる，明敏な状況認識であったと言ってよいだろう。『「言語」の構築／小倉進平と植民地朝鮮』の安田敏朗によれば，日本人に対して「バイリンガルであれ」，そして植民地民衆の「バイリンガリズム」を「貶めるな」と噛んでふくめる議論の根っこは，小倉のもっと古い時代にまでたどることができ，たとえば，「三・一独立運動」とその衝撃を受けた「文化政治」の時代に，すでに彼は次のように言っていたという。

> 言語の疎通は両民族融和の楔子たることは言ふまでもない。内地人にして朝鮮語を理解し，朝鮮人にして国語を了解するものの，直接間接に相互の感情を和らげ，其の利益を増進し得たるの例は実に枚挙するに遑が無い。[14)]

こうした日本人知識人の言説が，あくまでも植民地統治を効果的なものとするための体制維持的な発言であったことは疑えないが，少なくとも植民地における現実の内地人教育（それは内地の方法を全面的に踏襲するものであった）の現実を批判的に見る目は，統治者的なまなざしのなかにさえ宿っていたのである。

安田は，こうした言説の系譜をさらにたぐっていけば，1908年の金沢庄三郎まで遡ることができるという。

> 〔保護国化された大韓帝国で活躍する〕多数の〔日本人〕役人が何時までも通弁のみによつて朝鮮人と相接して居るやうでは，到底事務の挙がることは望むことが出来まい。〔中略〕それにしては，高等の教育ある者に朝鮮語を学修せしめる必要がある。[15)]

このような，言ってみれば，実利主義的な「バイリンガリズムのすすめ」は，その後の「内地人教員朝鮮語試験規則」（1918）や「朝鮮総督府及所属官署職員朝鮮語奨励規程」（1921）などに，まがりなりにも生かされはしたのである[16)]。

しかし，日本人が外地の日本人に向けて語った「バイリンガリズムのすすめ」と，カンナニの「バイリンガリズムのすすめ」を決定的に分かっているのは，ひとつには，それが統治にたずさわる当事者に対するそれであるか，内地人の子どもに対するそれかの違いである。龍二とカンナニのあいだでは，龍二が将来，朝鮮総督になる「夢」もまた語られていたわけだから，それは理想的な統治者像を念頭においた発言で

あったと考えることも可能である。カンナニは龍二を「疎外感」から解き放つだけではなく，「日本人は皆嫌ひ」と言わずに済ませられる朝鮮統治の可能性をもまた視野に入れた上で，次世代を担う日本人に向けた期待をこめてそう言ったのだと言える。また，それは1935年の湯浅が理想としていた朝鮮統治のあり方の投影だと見ることも可能だろう。そして，そうした理想を語ろうとする存在を闇に葬ろうとするほど，当時の日本の検閲は苛酷なものではなかった。

しかし，こうした理想主義を日本人の大のおとなが語るのならいざ知らず，朝鮮人の少女に語らせてしまった湯浅の作家的な下心の背後に読み取れることがらがもうひとつある。

それは「三・一独立運動」に見られるような朝鮮人ナショナリズムの台頭のなかで，かりに幼い少年少女の淡い恋の形をとるのだとしても，日本人の内地への引揚げ・撤退を無条件の前提とし，朝鮮語を朝鮮半島における唯一の「国語」であるとみなすような「解放」ではない，もうひとつの穏健な「解放」を夢見る朝鮮人の姿を描きたいという欲望，湯浅のなかにあったのは，そのような，ある意味で虫のいい欲望ではなかったか。この夢は，決して内地人側が「統治」を磐石なものたらしめるために語るものではなく，朝鮮の内地日本人が現地人と融和的に暮らしうる多民族国家・多言語主義的な国家構想として，朝鮮人みずからの口から自発的に提案されるべき（そうあってほしい），厚かましい日本人作家からお人好しの幼い朝鮮人に向けての，それこそ甘えに満ちたおねだりだったのである。

もっとも，そのような形で，湯浅によってカンナニに圧しつけられた言語政策は，結果的に，排日的な朝鮮人ナショナリストの群れに呑みこまれ，しかも朝鮮総督府の鎮圧行動に屈する形で，黙殺・圧殺されることになる。じっさい，この夢が朝鮮半島で生き延びることは現実には考えにくいものだった。しかし，そのカンナニの言語政策なるものは，大量の植民地出身者を領土内に残しながら戦後の再出発にふみきった日本に生れえたかもしれない可能態としての言語政策にも翻訳が可能だ。それは少なくとも日本主導の「大東亜共栄圏」の野望とは，似て非なるものであったし，また，それは戦後の日本国や大韓民国や朝鮮民主主義人民共和国がそれぞれに邁進している一言語国家とはまったく異なる装いを有する，もうひとつの国家構想なのである。

五．引揚者とバイリンガリズム

ここ数年間，歴史学や移民研究，文学研究の方面で，「引揚者」に対する関心が高まっている。とくに，朝鮮から「引揚げ」てきた内地日本人に関して，作家としては小林勝や森崎和江，後藤明生などへの関心が高い[17)]。

ただ本稿で論じたバイリンガリズムの観点から考えたとき，それら「引揚者」たちの「バイリンガル度」には相当なバラツキがある。戦後，朝鮮半島北部から時間をかけ，38度線を越えて「引揚げ」てきた後藤明生は，当時のみずからを「朝鮮語の達者な中学生」と位置づけ，家族のなかでも最も朝鮮語に精通していたから，38度線越えにあたって偵察係を命じられたくらいだと，おぼろげな過去をふり返っている[18)]。これは後藤の親が永興（ヨンフン）の町で商店を経営し，使用人や客のなかに朝鮮人が多かったこととも関係しているようだ。

反対に，森崎の場合は，父親が大邱の高等普

通学校で教諭，つづいて慶州（キョンジュ）では中学校校長を歴任した家庭に育ち，家には「オモニ」が家政婦として住みこんでいたものの，その「オモニ」は日本語がよくできて，その思い出のなかにも，朝鮮語の記憶はほとんど含まれていなかったようである。ただ，かたやみずからの朝鮮語能力を飼い殺しにしながら，戦後二十数年あまりを経て，満を持して植民地回顧小説を書くことになった後藤とは違って，森崎は「引揚げ」後に，逆に遅れを取り戻そうとするかのごとく，がむしゃらに朝鮮語＝韓語の勉強をはじめ，そればかりでなく，日本の図書館で手に入る朝鮮関係の日本語書籍を読み漁るようにもなる。

そして，ふと文学博士，高橋亨による朝鮮の民謡に関する著作を手に取り，その人物に興味をいだくのである。というのも，彼女はその名前を子ども心に父親から何度も聞かされていたからである。それもそのはず，森崎の父，庫次が赴任する前のことではあったが，高橋は大邱高等普通学校で校長を務めた経験があり，その後は，朝鮮総督府の視学官として「朝鮮における中等学校教育の大綱」の制定にあたっても強い影響力を行使した人物だった（高橋が朝鮮半島に渡ったのは，1903年，大韓帝国の招聘によるもので，そもそもは日本語教師だったが，滞在中に韓語＝朝鮮語に習熟し，1909年には早くも『韓語文典』を内地で刊行している）。

森崎によれば，父の庫次が学校で日本語一辺倒だったのは当然としても，彼自身，私人としても朝鮮語を学ぼうという意欲に富む人物ではなかったという。それこそ，野菜を売りにきたオモニに向かって「いくら？」ではなく「オルマ？」（p. 29）と尋ねる程度の会話力を身につけていた母の愛子の方が，朝鮮語能力では彼よりもレベルが上だったかもしれない。

しかし，朝鮮語に精通し，後に京城帝国大学創立委員会幹事を経て，1926年に開学した同大学法文学部では朝鮮語・朝鮮文学第一講座を担当して，内地人・朝鮮人を問わず多くの教え子を残すことになった年長，かつ目上の高橋に対して，森崎の父親は辛口のコメントをしばしば口にしていたという（「高橋亨とは考え方が違う。ぼくは……」（p. 48））。そもそも，早稲田大学時代に西洋思想に傾倒して，アナーキズムに近い政治信条の持ち主だったという前歴もあって，「植民地にあって」も「リベラリスト」[19]でありつづけた父のなかで，植民地で現地人の子弟を預かりながら，厳格な植民地教育にたずさわるという職業上の選択は，家の子どもたちに垣間見せることはなくても，数々の苦渋や葛藤を孕んだものであったにちがいない。そして，その高橋批判に嗅ぎ取れるのは，朝鮮語能力の有る無しや，高い低いにかかわらず，中等学校以上の教育においては，一律に内地に準じた教育を適用しようとした植民地官僚の行政的な判断に対する父の率直な違和感だったのではないだろうか。それこそ，日本で最初のアイヌ学者であった金田一京助が，アイヌ語研究に没頭しながらも，アイヌ語の生存に対してまったく無頓着であった[20]ことからも類推できるように，植民地の言語を知的な好奇心の対象として据えることはあっても，そのことが植民地支配がひきおこす現地語の「廃滅」に対して当人が切実な危機感をいだいていることの証拠とはならなかったのが，大日本帝国アカデミズムの限界だった。日本アカデミズムの朝鮮語に対する対し方は，前にも触れた小倉進平のように朝鮮語学習の必要性を内地人にも説こうとしたわずかな例外を除けば，それを「標本」とみなし，

もっぱら観察と研究の対象に据えて，朝鮮語を母語とする研究者や学生に対してすら，その言語に学問的に接する回路としては，日本語以外にはありえないとすりこみを図る傾向に強く彩られていたのである。

しかし，かといって，そのような状況のなかで，森崎の父親にいったいなにができたのか，彼が朝鮮人の子どもや若者たちに授けようとしたものの何であったか，そこは娘の和江自身も多くを語ってはいないので分からないが，日本による朝鮮の植民地支配に対する「罪責感」を基点にして過去をふり返るのをつねとした森崎は，自分の身内から，高橋のような植民地官僚，そして朝鮮研究者に至るまで，植民地に群がっていた日本人をおそらくはおしなべて恥ずべき存在として受け止めることになったのだろう。

いずれにせよ，植民地朝鮮において，内地日本人と現地朝鮮人は，否応なしにそれぞれのバイリンガリズムを生きなければならなかった。ただそのあいだには確実に非対称性が存在し，それは植民地主義という名の「一言語使用者であることの不都合が最小限に食い止められるシステム」の恩恵に浴しえたものと，そうではなかったもののあいだの非対称性だった。その恩恵に浴しえたものは，自分の自由意志と個人努力でバイリンガルになりえ，時としてはバイリンガルであることを武器にして，アカデミズムに安住できた。また，かりにそこで理想的なバイリンガルになりそこねたとしても，森崎のように，帰国後，「罪滅ぼし」のように朝鮮語・韓国語を学ぶことで，少しは肩の荷を下ろすことのできたのが植民者の側である[21]。それに対して，朝鮮人の場合には，彼ら彼女らの「言語権」を認めようとしない植民地帝国日本の圧政下において，群れとしてバイリンガルへの道を歩まされ，それを日本の恩恵と受け止めて，誇るものがかりにあらわれたとしても，それは一部にすぎず，それこそ「外国語に堪能なのを見ては亡国の民族ででもあるかの如く貶め見る癖がある」ひとびとのまなざしに日常的に晒されなければならなかったのが被植民者だった[22]。見ようによっては，戦後の朝鮮半島における日本語アレルギーは，図らずも身につけてしまった，みずからのバイリンガル性に対する吐き気であったのかもしれない。

少女カンナニの言語政策は，日本人・朝鮮人の双方に禍根（罪障感や嫌悪感）を残さず，バイリンガルであることがごく自然な日常であるような世界を夢見るという言語思想に基づいていた。この理想主義は，当時からすれば反時代的であったかもしれないが，いまのわれわれの眼には古びていない。

注

1） 小説「カンナニ」からの引用は，『文学評論』1935年４月号に掲載された初出からとし，以下の引用にあたっては，同誌の頁数を本文中に記すこととした。この初出は，池田浩士＝編『湯浅克衛植民地小説集・カンナニ』（インパクト出版会，1995）に復刻されている。なお，引用に際しては旧漢字を新漢字に改めた。

2） 森崎和江『慶州は母の呼び声』（1984）からの引用は，ちくま文庫版『慶州は母の呼び声』（1991）からとし，同書の頁数を本文中に記すこととした。

3） 日本の植民地文学を，西洋列強のそれと比較する「比較植民地文学」の構想については，『越境する言の葉：日本比較文学会創立60周年記念論集』（日本比較文学会編，彩流社，2011）所収の拙稿「海外の日本文学：日本語文学の越境的な読みに向けて」（pp. 141-148）を参照されたいが，植民地生まれ・植民地育ちの宗主国系の

子どもが，現地の子どもたちに対して，優越感ではなく，劣等感や疎外感を感じてしまうケースとしては，たとえばジーン・リースの『サルガッソーの広い海』（1966）がひときわ注目に値する。そこには美談で終わるようなエピソードはいっさい描かれず，主人公の白人少女は，アフリカ系の少女から「昔の白人は，今は白い黒んぼでしかないし，黒い黒んぼのほうが白い黒んぼよりずっとまし」（『〔池澤夏樹＝個人編集〕世界文学全集Ⅱ―20』小沢瑞穂訳，p. 279）とまで言われ，完膚なくやりこめられる。

4）　初出における伏字や削除の経緯，および戦後の再編集版の成立過程については，前掲『湯浅克衛植民地小説集・カンナニ』所収の池田浩士による「解題」（pp. 526-527）に詳しい。

5）　前掲『湯浅克衛植民地小説集・カンナニ』の「解説・湯浅克衛の朝鮮と日本」のなかで，池田浩士は「「カンナニ」の「前半部分」だけを取り上げながらも，「湯浅克衛が直面していた困難な問題の本質を，きわめてするどく衝いている」（p. 592）として，中野重治の作品評（『都新聞』1935年３月31日付「文芸時評」）の全文を引いている。「彼ら〔＝龍二とカンナニ〕は幾つかの点で，大人も及ばぬ子供達であり，民族の運命を肩にしている」と書いた中野重治は，さらにふみこんで，ここには「子供の世界の中の民族―階級闘争が，全くの子供らしい日常生活の中で進んでゐる」とも書いている（p. 591）。

6）　金素雲＝編訳『乳色の雲』（1940）に寄せたエッセイ「朝鮮の詩人等を内地の文壇に迎へんとするの辞」のなかで，佐藤春夫は次のように書いている――「卿等の廃滅に帰せんとする古の言葉を卿等が最も深く愛しようと思ふならば，宜しく敢然として日常の生活から抛棄し去つてわづかに詩の噴火口からこれを輝やかな光とともに吐くに如くはあるまい。若し夫れたゞ一人のホーマー，一人のゲーテ，一人の杜甫，一人の人麻呂が卿等の間に生れさへすれば，その詩篇のために卿等の失はるべき言葉も世界に研究せられて千古に生きるを妨げないであらう」（岩波文庫版『朝鮮詩集』，1954，p. 228）。植民地朝鮮の学校で朝鮮語教育が全面的に停止されたのは史実であっても，その言語を「廃滅に帰せんとする」ものとして位置づけたこの文章は，たとえば『アイヌ神謡集』の「序」のなかで，アイヌの口頭伝承や言語そのものの未来を想像しながら，「それらのものもみんな果敢なく，亡びゆく弱きものと共に消失せてしまふのでせふか」（『〔炉邊叢書〕アイヌ神謡集』郷土研究社，1923，p. 2）と自問した知里幸恵のペシミズムを不用意になぞったものなのだろうか，植民地官僚でさえ，朝鮮語をここまで瀕死状態に追いこまれた状態にあるとは理解していなかっただろう。佐藤春夫の名誉を傷つけることになるかもしれないが，ここでは，内地日本人のシンボリックな朝鮮語観として，敢えて「廃滅」という言葉を流用した。

7）　これは戦後のドイツ語作家，ヨハネス・ボブロフスキの小説『レヴィンの水車』（1961）を論じるなかで，かつてドイツ語とポーランド語の二重言語使用が常態であった「西プロイセン」で，まずはプロイセンの統治，そして第一次世界大戦以降のポーランド統治下で，リレー式に強化された「国語」の一言語支配を形容した表現である（拙稿「多言語的な東欧と「ドイツ人」の文学」，高橋秀寿・西成彦＝編『東欧の20世紀』人文書院，2006，p. 191）。しかし，この「国語ヘゲモニー」は植民地主義一般にも応用できると考えて，ここに用いた。

8）　クロード・アジェージュ『絶滅する言語を救うために――ことばの死とその再生』糟谷啓介訳，白水社，2004，p. 248。

9）　大津留厚『ハプスブルクの実験／多文化共存を目指して』春風社，pp. 38-39。なお，引用文は「オーストリア国民の人権に関する基本法（1867年第142号法）（憲法）」の「第19条」である。また，同書では，多言語国家の軍隊内部で，指揮系統と多言語性との関係についても詳説されていて，軍内部の「指揮語」（＝「前へ進め」など）および「服務語」（＝軍務で用いる言葉）はドイツ語と定められていたが，連隊内の会話や教練で使われる「連隊語」は「構成する兵士たちの母語」と決められたという（同書pp. 70-71）。大日本帝国は土壇場まで植民地臣

民の徴兵を自粛・恐怖していたし，こうした軍隊内部の言語問題に苦慮した形跡はないと思われる。

10）　イ・ヨンスク『「国語」という思想――近代日本の言語認識』（岩波書店，1996）は，国語学者保科孝一の位置をさぐった先駆的な研究であり，「第11章 朝鮮とドイツ領ポーランド」では朝鮮統治のモデルとして「ドイツ領ポーランド」が参照された経緯が書かれている。なお，そこで観察の対象とされたポーゼン州は，第一次世界大戦終結後，ポーランド領となる。

11）　『〈他者〉としての朝鮮／文学的考察』（岩波書店，2003）の渡邊一民は，「感動をとおして，三・一独立運動の輪郭がくっきりと見えてくるところに「カンナニ」を「カンナニ」たらしめているものがある」（p. 48）と書いている。本稿では，戦後にようやく公開された小説の後半部分を度外視する立場をとったため，こうした作品評価に与するものではないが，敢えて補足すると，同じく「三・一独立運動」の余韻が醒めやらぬなかで書かれた中西伊之助の「不逞鮮人」（1922）まで含め，日本人がこの紛争鎮圧を描こうとするときに，朝鮮人女性の犠牲者にことさらに光をあてる傾向（それは朝鮮半島においても事情が似通っているかもしれない）については，しかるべく検討の余地があるだろう。米国の韓国系女性表現者テレサ・ハッキョン・チャが『ディクテ』（1982）のなかで，「韓国のジャンヌ・ダルク」と呼び声の高い柳寛順（ユ・グァンスン）にスポットライトをあてたのとはまた違った文脈がそこにはあるはずである。ちなみに，池内靖子は，『ディクテ』における柳寛順の描き方について，「国語と国民の構築やそれへの欲望，絶対的同一化と回帰という観念に還元的に翻訳してしまう」ような読みを退けつつ，そのテクストが「失われたものを再現・提示・表象することの不可能性の感覚に貫かれたもの」であることを強調している（「境界に立つということ」，池内靖子・西成彦＝編『異郷の身体／テレサ・ハッキョン・チャをめぐって』人文書院，2006，p. 11）。本論が試みているのもまた，水準は異なるが，カンナニを「三・一独立運動」の「殉教者」とみなすことを徹底的に回避しようとする読みである。

12）　ここでの「私（ウリ）」は，「私たち（ウリ）」の方がより正確だが，そこには目をつぶるとして，1946年に湯浅克衛自身が再編集した「完全版」（『カンナニ』大日本雄弁講談社）では，これらのルビが落ちて，ただの「お前と私は……」になっている。本論が初出にこだわりたい理由のひとつに，こうした「完全版」に見られる味気なさがある。

13）　小倉進平「日本語の海外発展策」『日本語』１巻１号，1941年４月，p. 12――なお，本引用は安田敏朗『「言語」の構築／小倉進平と植民地朝鮮』（三元社，1999，p. 128-129）からである。

14）　小倉進平『国語及朝鮮語のため』ウツボヤ書籍店，1920，「緒言」p. １――本引用も安田前掲書（p. 63）からである。

15）　金沢庄三郎「朝鮮語研究の急務」『国学院雑誌』14巻１号，1908年１月，pp. 44-45――本引用も安田前掲書（p. 48）からである。

16）　朝鮮総督府が下したこれらの規則は，あくまでも朝鮮語習得の「奨励」であって，「義務」の明示ではなかった（安田前掲書，p. 51）。

17）　歴史学では成田龍一や浅野豊美ら，社会学・移民研究では蘭信三らの研究が先駆的だが，文学研究では，朴裕河「引揚げ文学論序説―戦後文学のわすれもの」（『韓国日本学報』第81輯，2009，pp. 121-130）が，ある意味で本格的な研究に向けての画期的な第一歩である。小林勝・森崎和江・後藤明生などに関してはいくつか優れた個別的な研究があるが，ここに敢えて列挙はしない。

18）　後藤明生『夢かたり』中公文庫，1978，p. 128。

19）　新木安利『サークル村の磁場／上野英信・谷川雁・森崎和江』海鳥社，2011，p. 55。なお，森崎庫次については，本書と『森崎和江コレクション　精神史の旅５』（藤原書店，2009）所収の「自撰年譜」から多くを教わった。

20）　知里幸恵と金田一京助との関係については，丸山隆司『〈アイヌ学〉の誕生／金田一と知里と』（彩流社，2002），西成彦・崎山政毅＝編

『異郷の死』（人文書院，2007）等を参照されたいが，後者所収の拙稿「バイリンガルな白昼夢」は，知里幸恵の後見人・遺産相続人でもあったはずの金田一が「アイヌ語の未来」に関してはまったく無関心なアイヌ学者であったことをさまざまな角度から洗い出した論考である。

21）　森崎が朝鮮からの引揚者であったわりに，朝鮮語の知識に乏しい内地人であったことを逆手に取る形で，佐藤泉は，朝鮮人であったにもかかわらず，朝鮮語を「奪われた側の息子」としての金時鐘と，「奪った側の娘」の森崎を並置し，二人が「逆の方向から，しかしともに深々と植民地を生き」たと論じている。そして，二人は「個人史の感覚を『日本語』に対して差し向けるべき問いとして，かろうじて形にした」というのである（「いかんともしがたい植民地の経験」，青山学院大学文学部日本文学科＝編『異郷の日本語』社会評論社，2009，pp. 76-77）。なにがしかの形でバイリンガルであった植民地出身者の日本語を見るにあたって，むしろその「単一言語使用」に着目する佐藤の視点は，金時鐘ばかりでなく，朝鮮出身の在日日本語表現者全般の特徴を考えるときにも有効だろう。バイリンガルな人間は，単純にバイリンガル性のなかにどっぷりと浸かるのではなく，むしろ，そのいびつなバイリンガル性を「傷」として描き出すために，一言語を酷使する方法をとる場合がある。そして，森崎に特徴的なのは，一方で，遅ればせながら朝鮮語＝韓語の回復に情熱を燃やしながら，他方では「異言語」としての日本語の酷使にもたずさわるという二つの営みに，同時に，しかし違った水準で取り組んだ点にある。これこそ，李恢成や李良枝などの朝鮮語＝韓語および日本語との関わり方にも通じる，決して重合することのない二重性なのだ。

22）　『屋根の上のバイリンガル』（筑摩書房，1988）のなかで，沼野充義は「君はすごいねえ，バイリンガルだねえ」と褒められて，「はい，そうです」とぶっきらぼうに答えた多民族国家出身の女性のエピソードを引き合いに出しながら，それは「バイリンガルなど褒め言葉にもならない」状況が世の中には存在する上に，「バイリンガル」という言葉が「共通の公用語を満足に話せない知的に劣った少数民族」のイメージにさえ結びついて，「差別語のような響きを持っていた」からだと説明を施していた（pp. 180-182）。本論を書きながら，このことがふと脳裏を掠めた。

The Linguistic Policy of a Korean Girl, Kannani

NISHI Masahiko *

Abstract: Kannani is the common name of the heroine in Yuasa Katsue's first novel, which was published in 1935 and aroused polemics, though it seemed to have been seriously mutilated by Japanese censorship. This paper aims at reevaluating the novel, paying attention in particular to Kannani's encouragement of bilingualism to her Japanese boyfriend, Ryūji. It might have looked eccentric at that time, because bilingualism was negatively esteemed by Japanese monolinguals and by Korean nationalists as well. Actually we are well-prepared, however, to appreciate it in the context of contemporary multiculturalism and multilingualism. The main method of this paper is to locate the novel in the historical context around 1919, referring from time to time to the East European situation just after the end of WWI, when the principle of national self-determination was optimistically expected to be able to coexist with the protection of minorities' rights, and at the same time comparing it with the quite different situation in the region after WWII, when cohabitation of a national majority with minorities in a nation-state was anticipated to possibly result in another disaster like the Holocaust in future. In the final chapter, I make efforts to outline the synopsis of successive literary approaches in the long term to other writers of bilingual backgrounds, composed of both homecoming Japanese citizens (Hikiage-sha) and Korean residents in Japan (Zainichi) who restarted their lives on the Japanese mainland after the end of WWII. This paper will constitute part of my next book on Colonial Literature and Bilingualism.

Keywords: comparative literature, colonialism, self-determination, language education, language policy, bilingualism

*Professor, Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences, Ritsumeikan University